



## International Program

- Outline
- Welcome Message
- Guidebook · Newsletter

## Member Profile

ICDD

## About Us

- What is ICDD?
- NEW** International Dental Course
- NEW** International Dental Program
- NEW** Reports/Others
- Web lecture



## International Collaboration Development for Dentistry

HOME » International Collaboration Development for Dentistry » International Dental Course » Publications-a case report on Journal of JDEA vol.28

### International Dental Course, International Dental Program, Report/Others

## Publications-a case report on Journal of JDEA vol.28

2012.12.18 | Written by Jomo I. [日本語](#) [English](#)

Our case report about a collaboration of trainee dentists and undergraduate international exchange programs has been accepted by Journal of Japanese Dental Education Association (vol.28).

Assessment of a Pilot Collaboration of Trainee Dentists and Undergraduate International Exchange Programs : Hiroko Oka, Udijanto Tedjosongko, Tetsuji Ogawa, Takashi Takata : Journal of Japanese Dental Education Association, 28, 175-183, 2012.

## 研究報告

## 歯学部国際交流プログラムへの研修歯科医参加の試みとその評価

岡 広子<sup>1)</sup> ウディヤント テジョサソコ<sup>1,4)</sup>  
小川 哲次<sup>2)</sup> 高田 隆<sup>1,3)</sup>

抄録 広島大学歯学部では毎年海外協定校と連携して、国際交流プログラムを実施している。国際交流プログラムの目的の1つは、学部学生間あるいは構成員との国際（異文化）コミュニケーションを通し、相手の歴史・文化・経済的背景を学ぶとともに自国の歴史・文化・経済的背景を深く学び直すという「内なる国際化」を促すことにある。

そこで、「国際（異文化）交流の活性化」と「国際交流を介したお互いの学びあいの促進」を目的に、2011年度に本学歯学部での国際交流プログラムの一部に研修歯科医が参加し学生とともに学びあう新たな演習を組み込むこととした。

演習終了後の評価では、参加学生のほぼ全員から「演習に満足した」との回答が得られた。参加研修歯科医からの評価を分析した結果、1) 研修歯科医には、演習内でのコミュニケーションを通して、当該国の学生の現実を知ることで自分の現状への気づきが得られていた、2) 研修歯科医には、第2言語としての英語の実態や日本語を話せない相手とのコミュニケーションにおいて言語以外のスキルも重要であることが理解されていた、3) みずから演習の過程に主体的にかかわり、積極的に学ぶ、あるいは何かを得ようとする意識が少ない研修歯科医が多くみられた、ということが明らかとなった。

今回の評価から、参加者（研修歯科医および交流プログラム学生）の参画要素の比重を高めた取り組みへ仕組みを改善すること、取り組みに対する振り返りを確実に実行する体制を整えることが次の課題であると考えられた。

キーワード 国際化、協調学習、留学生、研修歯科医、開発

## 結 言

近年、歯科医療・医学・研究のグローバル化は周知の事実であり、歯科医療に携わる者は国際化に対応する能力が求められている。広島大学歯学部では毎年海外協定校と連携して、国際交流プログラムを実施している。また、2012年度より新たに特別聴講学生の制度を活用した国際歯学コースを設定し、学部での教育自体も日本人学生と外国人留学生がともに4年間歯学専門教育を日本語-英語で学ぶ体制へと変わりつつある。これらの国際交流プログラムの目的は、学部学生間あるいは構成員との国際（異文化）コミュニケーションを通し、相手の歴

史・文化・経済的背景を学ぶとともに自国の歴史・文化・経済的背景を深く学び直すという「内なる国際化」を促すことにある。

本学歯学部の国際交流プログラムは2006年から本格的に開始した。年々歯学部で受け入れる国際交流学生の人数は増加し、2010年度は合計45名を受け入れている<sup>1)</sup>。その大半は、日本滞在期間が3カ月未満の短期プログラムである。清水らは、国際交流学習の実践事例を「Ⅰ.協同的交流型」、「Ⅱ.交流重視型」、「Ⅲ.場利用型」、「Ⅳ.成果共有型」の4型に分類している<sup>2)</sup>。本学歯学部で行う短期国際交流プログラムの多くは、これまで、「交流自体に参加者にとっての意味がある」もので交流活動はイベントとしての要素が強い「Ⅱ.交流重視型」、あるいは担当教員が割り当てられた時間内の講義を任されて講義でのQ/Aを通しての「知の交流」を行う「Ⅲ.場利用型」に当てはまる内容で構成されている。しかし、プログラム全体を通してみると、演習や講義は担当教員による「講演型」の形式となり、この「国際（異文化）コミュニケーション」を通じて、学生と担当教員以外が、それぞれがそれぞれの文化とその背景などの一端を学び

<sup>1)</sup> 広島大学大学院医歯薬保健学研究院 統合臨床科学部門 国際歯科医学連携開発学分野

<sup>2)</sup> 広島大学病院口腔総合診療科

<sup>3)</sup> 広島大学大学院医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 口腔顎顔面病理病態学分野

<sup>4)</sup> アイルラング大学歯学部

平成24年8月6日受付

平成24年9月24日受理

あうという要素が少ない傾向があった。

そこで、交流プログラム留学生と本学歯学部「国際(異文化)交流の活性化」と「国際(異文化)交流を介したお互いの学びあいの促進」を目的に、広く歯学部を構成する人員と学びあう場として、2011年度の国際交流プログラムへ試験的に「臨床検査(う蝕リスク検査)を学ぶ」をテーマに、研修歯科医が「教える」、留学生が「教えられる」という過程を通してお互いに学びあうための新たな演習を組み込んだ。

本研究では、本演習後に研修歯科医と交流プログラム学生に実施した記述式質問紙調査を基に、国際交流プログラムの目的の1つである、留学生あるいは構成員との国際(異文化)コミュニケーションを通じ、相手の歴史・文化・経済的背景を学ぶとともに自身の歴史・文化・経済的背景を深く学び直すことへの達成状況についての検証を行った。

## 対象および方法

### 1. 対象および演習

2011年度に本学歯学部で実施した短期国際交流プログラムのうち3プログラムにおいて研修歯科医が担当する演習を実施した。演習は「口腔総合診療科演習」としてう蝕リスク検査(CRT)、口腔内写真撮影、院内ツアーおよび質疑応答などの内容を素案として提示し、修正および最終決定は研修歯科医に委ねた。プログラム内の演習スケジュール、院内ツアー・見学先診療科との事前調整は歯学部国際化担当教員および口腔総合診療科の教員が行い、演習内容自体の計画、備品や設備準備および当日の運営は教員の監督の下、研修歯科医が主体となって行った(図1)。第1回(2011年8月)および第2回(2011年11月)の短期国際交流プログラムではCRTと大学病院院内ツアーを基軸とした約180分(1日目)と約90分(2日目)の2日間にわたる演習、第3回はCRTと口腔総合診療科内の案内を主とする約180分(1日)の演習を行った。演習には台湾、タイ、インドネシアの協定校歯学部学部学生計32名と本学病院研修歯科医延べ38名(内複数回参加者2名)が参加した(表1)。なお、表1の「内容」にある「その他」は、第1回演習のなかではCRTの結果や各国の研修生活などについてのスケジュールとして予定されていたディスカッションの時間であり、第3回演習のなかでは研修医自身が考えて行った時間調整を兼ねた相互印象採得や診療科チェアの説明を指す。

### 2. 質問紙評価

記述回答部分を含む質問紙評価は、結果を学内外での広島大学歯学部 Short Exchange Program の報告および

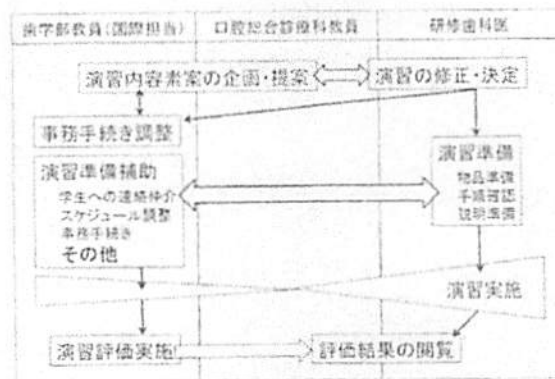


図1 演習実施の概略図と当日(第2回)の様子  
(写真掲載については本人の同意を得ている)

改善のために使用することに対して回答者の同意を得たうえで演習終了後に実施した。対象は参加研修歯科医および参加学生である。評価に用いた質問事項を表2-a, bに示す。交流プログラム学生はプログラム期間中の本演習を含め1回あるいは2回で完結する講義演習に複数参加し、そのすべてについて同様の評価を行うことから、評価に対する負担を考慮して自由記述を主体とする評価(表2-b)とした。評価用紙の回収数は、研修歯科医33、交流プログラム学生32(タイ2、インドネシア4、台湾26)であった。複数回参加した研修歯科医からの重複提出はなかった。また、「感想を自由に書いてください(研修歯科医用)」および「Please write your impression and comment about the class(交流プログラム学生用)」に対する自由記述部分には研修歯科医29名、交流プログラム学生27名が回答した。

### 3. 集計および分析

研修歯科医への「今回の演習を担当したことは、あなたにとって有意義でしたか、そう思うのはなぜですか。」との質問に対する記述回答は、類似の意味の記述に分類して集計した。「感想を自由に書いてください(研修歯

表 1 2011 年度広島大学短期国際交流プログラム口腔総合診療科演習概要

	第 1 回 (8 月)	第 2 回 (11 月)	第 3 回 (1 月)
参加 研修歯科医数	27 名	5 名	6 名
参加学生数	17 名 (台湾)	6 名 (タイ, インドネシア)	9 名 (台湾)
時間	90 分×2 90 分×1 (2 日間)	90 分×2 90 分×1 (2 日間)	90 分×2 (1 日間)
内容	CRT, 院内ツアー, 口腔内写真撮影, その他	CRT, 病院紹介, (大学紹介), 口腔内写真撮影	CRT, 病院紹介, 口腔内写真撮影, その他

表 2 評価に用いた質問事項

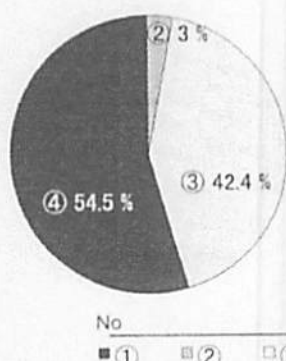
2-a 研修歯科医用					2-b 交流プログラム学生用				
○今回の演習を担当したことは、あなたにとって有意義でしたか。 (4 段階で答えてください)					○Did you satisfy with the class 'Advanced General Dentistry'?				
					口腔総合診療科の演習に満足しましたか。				
No					No				
Yes					Yes				
1 2 3 4					1 2 3 4				
○そう思うのはなぜですか。(記述)					○Please write your impression and comment about the class.				
○感想を自由に書いてください。									

表 3 参加研修歯科医記述回答の構成概念とテキスト例

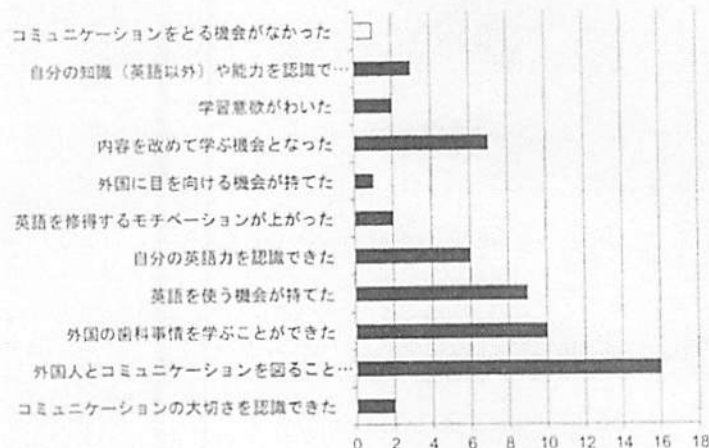
構成概念	評価用紙(研修歯科医)中のテキスト例
振り返り (positive)	「貴重な経験になりました」「負けていられない」「いい勉強になりました」「とても有意義だった」「きちんと説明しようと努力できた」
振り返り (negative)	「うまくしゃべることもできなかった」「力不足」「留学生を困らせてしまった」
自己主導の意識	「参加して」「コミュニケーションを取りたい」「ぜひ参加したい」「きちんと説明しようと努力できた」
他者主導の意識	「練習をもっとしてもらえれば」「気づかせていただいた」「今後も続けてほしいです」「体験」
他者を含めた振り返り	「…先生は大変だったと思う」「練習をもっとしてもらえれば」「お互いに」「私たちは」
異文化事象の指摘	「英語」「留学生」「留学生との交流」「日本との現状の違い」「他の国の歯科大学」「世界に出て勉強してみたい」
経験と比較	「英語力がないので」「新しいつながり」「比較できて」「知らなかったこと」
次への目標設定	「コミュニケーションを取りたい」「負けていられない」「世界に出て勉強してみたい」
成功体験としての認識	「良かった」「いい勉強になりました」「案内できた」「とても有意義だった」
コミュニケーション	「コミュニケーション」「留学生との交流」「フリートーク」「ふれあい」「新しいつながり」
その他	「カリエスリスク」「自分にとっては」「ありがとうございました」「勉強になりました (この 8 文字のみで回答)」

科医用) (表 2-a) に対する各自由回答記述は Step for Coding and Theorization (SCAT) の手法に即して<sup>3,4)</sup>、語句を抽出し構成概念へとコーディングして集計し検証

を行った。すなわち、各自由記述回答に対してスプレッドシート<sup>3,4)</sup>を用い、1) データの中の着目すべき語句を記入、2) 前項の語句をいにかえるデータ外の語句を記入、



2-a 今回の演習を担当したことは、あなたにとって有意義でしたか



2-b aでそう思うのはなぜですか

図2 質問事項に対する研修歯科医の回答結果



図3 自由記述回答部分(研修歯科医)の構成概念

3) 前項を説明するための概念、語句、文字列を記入、4) テーマ、構成概念を記入、の4段階を経てコーディングを行った、さらに集計に際して、SCATの過程をさまざまな向きに検証し、テーマ、構成概念のより単純・簡易なものへの取束を試みた、集計において、同一の構成概念に対して同一人物(同一回答用紙)の複数のテキストが該当した場合もその構成概念に対する集計は「1」とした、今回研修歯科医からの評価で用いた構成概念4)とテキスト中の注目すべき語句3)例は表3のとおりである、分析は、各自由記述回答に対してストーリー・ラインを紡いだ後、各自由記述に加えて回答者全体のストーリー・ラインから理論記述を試み、結果の記載方法は大山ら<sup>3)</sup>に準じた(表4)、交流プログラム学生の自由回答記述については、述べられている内容に対して分類を行った、

コーディングおよび分類は主に1名の研究者が行い、その内容は共著者間で検討・修正した、

## 結果

### 1. 研修歯科医の評価

回収した評価用紙のうち、「今回の演習を担当したことは、あなたにとって有意義でしたか」について「有意義であった」に相当する「4」および「3」への回答が、約97%であった(図2-a)、「有意義であった」理由として、「外国人とコミュニケーションを図ることができた」「英語を使う機会が持てた」「外国の歯科事情を学ぶことができた」などが多く挙げられた(図2-b)、

「感想を自由に書いてください」という項目に対しての自由記述回答は33名の用紙提出者のうち27名から得られた、回答はすべて日本語での記述であった(35~200文字)、これらの記述について、質的研究法の1つであるSCATを用いて、記述回答部分を分析した、構成成分をコーディングし、総回答人数当たりのパーセントを算出すると、「振り返り(positive)(70.4%)」「異文化事象の指摘(同70.4%)」「経験との比較(51.6%)」の順に取り上げが多かった、「コミュニケーション」は44.4%の回答で取り上げられていた(図3)、「自己主導の意識(37.0%)」と「他者主導の意識(33.3%)」はほぼ同数にみられ、「成功体験としての認識」は25.9%、「次への目標設定」は18.5%の回答で取り上げられた(図3)、分析の結果、1)研修歯科医には、演習内でのコミュニケーションを通して、当該国の学生の現実を知ることによって自分の現状への気づきが得られていた、2)研修歯科医には、第2言語としての英語の実態や日本語を話せない相手とのコミュニケーションにおいて言語以外のスキルも重要であることが理解されていた、3)みずから演習の過程に主体

表4 SCATにより抽出された結果(研修歯科医)

- 研修歯科医には、演習内でのコミュニケーションを通して、当該国の学生の現実を知ることによって自分の現状への気づきが得られていた。
- ・当初は未体験の異文化への憧れのようなものがあったのであろうが、当該国の学生の厳しい現実を知ることによって、自分の現状を吟味する機会を得た。
  - ・当該国の歯科事情や学生の状況を知ることが、自分たちの現状を振り返り、目標を設定し直す機会となった。
- 研修歯科医には、第2言語としての英語の実態や日本語を話せない相手とのコミュニケーションにおいて言語以外のスキルも重要であることが理解されていた。
- ・日本語が話せない患者とのコミュニケーション法を考えるきっかけとなった。
  - ・日本人以外にとっても英語は第2言語であり、英語の得手不得手にかかわらず相手にわかるようにジェスチャーやイラストなどを交え工夫して伝えることで相手の理解を得られる可能性がある。
  - ・検査内容が同じであっても、相手に応じた準備や対応をすることが重要であるということを理解できた。
- みずから演習の過程に主体的にかかわり、積極的に学ぼう、あるいは何かを得ようとする意識が少ない研修歯科医が多くみられた。
- ・演習がうまくいかなかった現実を振り返り、ともに取り組む仲間同士の間の事前のコミュニケーションの重要性に気づいた。
  - ・外国人に対応するためには、現状の研修歯科医の英語力は不十分であり、今回の演習のような機会の設定はその改善に役に立つ可能性がある。

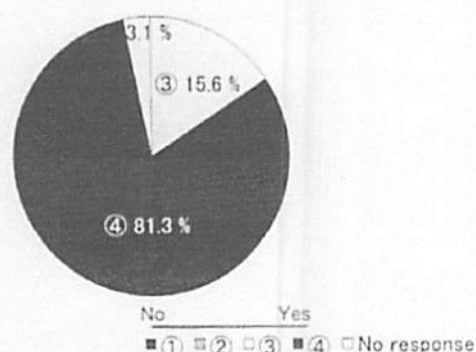


図4 口腔総合診療科の演習に満足しましたか

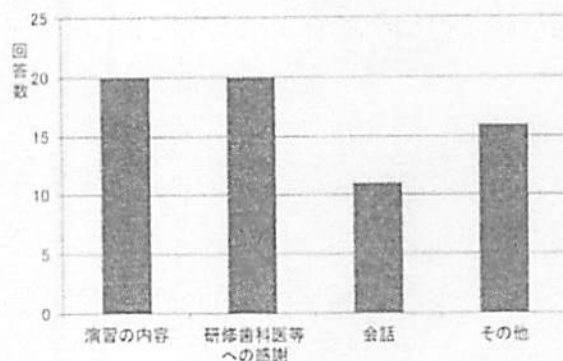


図5 交流プログラム学生の自由記述回答部分で述べられた内容

的にかかわり、積極的に学ぼう、あるいは何かを得ようとする意識が少ない研修歯科医が多くみられた、という結果が得られた(表4)。

## 2. 交流プログラム学生からの評価

回収した評価用紙のうち「口腔総合診療科の演習に満足しましたか」について「満足した」に相当する「4」および「3」への回答が96.9%、「満足しなかった」に相当する「2」および「1」への回答は0%、無回答は3.1%であった(図4)。

自由記述部分(「Please write your impression and comment about the class」)に対する回答は29名から得られた。うち、英語での回答は26件(6~118 words)、日本語での回答は3件であった。

記述回答を構成内容で分類したところ「演習内容に関

するもの」「研修医への感謝を述べたもの」「演習中の会話に関するもの」の順で多かった(図5)。これら3つに当てはまらなかった「その他」には、「大学病院の設備についての感想」「研修歯科医の印象」「台湾の事情と合わせたカリエスリスク検査についての考察」などが含まれる。

## 考 察

### 1. 研修歯科医からの評価

「国際化に対応できる人材育成の促進」が叫ばれて久しいが、研修歯科医の「内なる国際化」に対応する国内での機会は多くない。10年来行っている国際交流プログラムに加えて2011年度に日本学生支援機構(JASSO)によるShort Stay(SS)プログラムに採択され、今後も

さらに多くの外国人学生を迎えることが予想される本学歯学部においても歯学部を構成する広い範囲で交流プログラムを再構築する時期となっていた。

今回の新たな取り組みにおいて、参加した研修歯科医の多くは、演習を振り返り、「有意義であった」と回答していた(図2)。「有意義であった」理由としては、演習当日に日本人以外とのコミュニケーションを取ったことに起因する事項が多く挙げられた(図3)。演習にあたり当初、準備などのプロセスを通して内容をさらに理解するきっかけとなることも予想されたが、回答中で「内容を改めて学ぶ機会となった」との指摘は少なかった。一方、「有意義でなかった」との回答を寄せた研修歯科医(1名)は「コミュニケーションを取る機会がなかった」ことを理由に挙げた。これらのことから、今回の研修歯科医の評価は主に「交流」を重視してなされていると推察される。

自由回答記述の分析結果から、今回の演習で研修歯科医は、決められた内容で行われた実際の演習時間内での自分自身と外国大学生とのやりとり自体あるいは、その場での気づきに基づき自分自身の現状を振り返る機会を得たことに意義を見だしていることが明らかとなった。「他者を含めた振り返り」に関しては、当日の交流プログラム学生の様子に基づくものが多くみられた。このことから、研修歯科医にとって国際(異文化)交流の活性化を通して、研修歯科医と交流プログラム学生がお互いに学びあうという点は理解と評価が得られたと考えられる。

その一方で、ほかの研修歯科医へ向けての振り返りやともに取り組んだプロセスに対する振り返りは皆無であった。岡田ら<sup>1)</sup>は、さまざまな研究者の意見を整理して「互恵的相互依存関係の成立」「二重の個人責任の明確化」「促進的相互交流の保障と顕在化」「協同」の体系的理解の促進」の4条件を満たそうと意図されるグループ学習を日本語で「協同学習」としている。著者らは、演習当日までの取り組みを研修歯科医間の「協同学習」の場としても期待していた。また、評価自体へはほぼ全員に参加を期待したが、評価用紙自体の回収率は参加研修歯科医延べ38名中33名、自由記述回答部分への回答は27名であった。今回の評価は歯学部国際化担当教員が演習前に研修歯科医全員に向けて評価の活用について説明したうえで、演習後ディレクター(演習ごとの代表者)を介しての参加研修歯科医に評価用紙を配布・回収するという形式であった。今回、評価への参加が少なかったことについて、演習に参加した研修歯科医の理解や同意が得られなかったのか、評価の実施についての伝達に不備があったのかなど、無回答に対する個々の理由は不明であった。全体の過程を通して、取り組み姿勢は受動的

で、当日以外の過程に主体的にかかわり何かを得ようとする意識が少ない研修歯科医が多くみられた。

評価の内容に関しては、参加学生に比較すると記述部分に対する回答は多く、踏み込んだ印象のものが多かった。しかし、回答量や回答の形式、提出期限の遵守などの状況は研修歯科医によりさまざまであった。和泉はMoonの分類<sup>2)</sup>を基に、「ふりかえり」深度を「描写的な書き方」「描写的なふりかえり」「対話的ふりかえり」「クリティカルなふりかえり」と紹介している<sup>3)</sup>。今回の研修歯科医の記述を「振り返り」として捉えると、「描写的なふりかえり」にとどまるものも多かった。演習に対する評価用紙が研修プログラム内のポートフォリオ内の「振り返り」と形式が異なったため、個人によって回答方法への戸惑いがあったとも考えられる。

いずれにせよ、今回の「振り返り」の深度状況やSCATの結果は今後演習の構築や目標設定に大いに寄与すると考えられる。

## 2. 交流プログラム学生からの評価

参加した交流学生は時間数や演習内容の差異にかかわらず、演習に満足していた。27件の記述回答を構成内容で分類すると、7割以上の学生が演習を担当した研修歯科医への感謝の意を述べていた。演習を観察していた著者自身も、説明を聴いたり演習内の作業で手を動かしたりしているとき以上に、研修歯科医と「会話」しているときのほうが生き生きとしていることに気が付いていた。各国の長期休暇を主に利用して日本へ来学する本学歯学部の同期国際交流プログラムは、各国の学期期間と日本の学期期間の違いにより、学生同士(日本人学生と交流プログラム留学生)の交流の場の設定に苦慮している。日本側の試験期間や全日本歯科学生総合体育大会(オールドシタル)の時期は、教職員と交流プログラム学生間の講義形式以外の内容を設定することが難しかった。今回の研修歯科医の参加した演習設定によって、新たな形で交流を図ることができたと考えられる。

しかし、交流プログラム学生の記述部分に対する回答は分量が100 words以下のものが多く、かつ大半が描写的な振り返りや「Thank you...」で代表される形式上のあいさつといったいわゆる「当たり障りのない」文章にとどまるものであった。さらに、評価用紙を提出しながら記述部分に回答しなかった学生は5名いた。参加留学生にとって英語・日本語ともに母国語ではない。プログラム初日に文章(英語)と口頭(英語)で評価への理解と参加を呼びかけたが、その内容の理解自体ができていない参加者の存在も否定できない。加えて、交流プログラム内に回答を作成するための時間設定が少なかったことを考慮すると、学生自身の考えを十分に記述回答中に

表すことができたかどうか疑問が残る。このような状況で、記述回答を用いて質的分析結果を出すということは適切でないかもしれない。参加学生の語学力に幅広い差が認められる可能性がある場合、あるいはプログラム期間中に回答のための時間を設定することが困難な場合は、来日前に評価に対する同意事項の確認を済ませ、記述回答にこだわらず、当日の評価項目ごとに multiple choice をより多く組み合わせた評価形式を検討することも選択肢として必要であると考えられる。

### 3. 演習の問題点

第1, 2回は教員のコーディネーター、いわゆる「お膳立て」の下、ディレクターを中心として演習を部分ごとに分業し、各行程について参加予定者の一部で事前の確認を行っていた。このような演習運営の仕組みのなかで、研修歯科医のなかには参加したことで有意義であったと感じたものの「やらされている」「人が準備したものをこなしている」という意識をもつ場面も少なからずあったと推察される。林は、「参加」の機会の拡大・向上する現代において、参加の質の飛躍・転換の必要性を指摘している<sup>9)</sup>。実際の第1, 2回目の演習では、演習最中にみずからの対応に不安や不足を感じ、最終的にその場にいた別科の教職員に急遽応援を頼むという研修歯科医も複数みられた。また、演習時間を大幅に超過したりあるいは逆に時間があまりにも早く終わるすぎたりしても研修歯科医が自分自身でフォローしないという場面もあった。一方、第3回の演習では、参加予定の研修歯科医6名全員でみずから事前のすべての手順の確認を行い、演習当日は研修歯科医みずからが臨機応変に時間や内容を調整する姿がみられた。回数を経るにつれ、研修歯科医全員で協同学習としてみずから主体的に取り組むという趣旨が関係者間で徐々に理解されつつあったと推察される。

交流プログラム学生のなかには、事前の情報が共有されておらず、実際の演習当日に初めて演習で何をするか知った学生もいた。演習に向けて来日前あるいは演習前に学習する機会を設定していないこと、お互いの準備・理解状況についての情報が十分に共有できていなかったことも2011年度の演習の問題点と考えられる。

### 4. 今後の国際交流プログラムへの研修歯科医の参加形態

今回の国際交流プログラムへの研修歯科医の参加は、研修歯科医自身が国際化に対応する能力について考えるきっかけとなったと示唆される。参加型学習を林は「参集」「参与」「参画」の3段階で説明している<sup>10, 11)</sup>。第1段階「参集型」は、学習者が個人として「いあわす」もの

であり、これまでの本学歯学部への国際交流プログラムに多くみられた受動的な「講演型」の内容はこのステージにとどまっていたと考えられる。次のステップの「参与型」は、他者と能動的に「かかわる」状況が存在するものである。第3段階「参画型」は、学習者みずからが学びの“場”自体の設営・運営（経営）を担う。林はこれらの段階はらせん状に発展・進化すると述べている。

われわれは今回の試験的演習において複数の研修歯科医と交流プログラム学生が接触することで、いままでのプログラムに欠けていた双方向、あるいは多重方向の学びあいのやりとりが生まれることを期待していた。2011年度は国際交流プログラム、研修プログラム双方にとって初めての取り組みであったため、演習内容に関しては企画の取りかかりから、教職員が主導していた。結果として演習の内容自体は参加型のなかでも、「う蝕リスク検査を実施する」というテーマの下に参加者が「参集」し、検査や結果説明に研修歯科医が「参与」するという形式の比重が高いものとなった。一方で、研修歯科医が日本での歯科臨床のイメージを伝える、交流プログラム学生は母国のみずからが受けている教育や現状について伝えるという形でお互いに「参画」し、お互いに学びあうという状況を得られた。

今後は、当日までの準備の段階から交流プログラム学生、研修歯科医、教職員から多方向に学びあう<sup>10)</sup>場をもつことが、より充実した演習への発展に必要と考える。また、参加者自身が学んだことについて評価し、伝えていく過程まで含めた全体のプロセスに対して「参画」できる要素の検討も必要であろう。

大学における学生参加型の授業実践についての報告が散見される<sup>12, 13)</sup>ものの、短期国際交流の場合の参加者の直接的な接触はより限られた時間となる。しかしながら、今回の試験的な演習の経験や評価からも、参加者にとって緩やかな協力関係の下で学びあう「協同学習 (collaborative learning)」<sup>14)</sup>の場としての可能性をもっていることが再認識できた。近年、学習のツールとして、e-learning の利用に関する報告が認められるようになった<sup>14, 15)</sup>。本学でも2001年よりWebCTを導入し情報メディアセンターがアカウントを管理している。今後は学外者を含めた国際交流プログラム参加者間の協同学習の支援にWebCTを介したコミュニケーションの利用も考慮していく価値があると考えられる。

今回の経験・評価を踏まえ、国際プログラムにおいて、学習者（研修歯科医および交流プログラム学生）自身が主体的に内容の企画の段階から演習に参画する場をより積極的に設けた体制へ変えていくことで、互いにかかわりあいながら学びあう「協同学習」の効果が得られるプログラムへの発展も期待できる。2012年度は、WebCT



を新たに取り入れるとともに、研修歯科医が演習の企画の段階からかかわった仕組みへと改善して演習を実施中である。

## 結 論

2011年度水学歯学部では、計3回の短期国際交流プログラムのなかで研修歯科医と交流プログラム留学生がともに参加する新たな演習を実施した。演習に対する研修歯科医の評価の分析結果から、1) 研修歯科医には、演習内でのコミュニケーションを通して、当該国の学生の現実を知ることによって自分の現状への気づきが得られていた、2) 研修歯科医には、第2言語としての英語の実態や日本語を話せない相手とのコミュニケーションにおいて言語以外のスキルも重要であることが理解されていた、3) みずから演習の過程に主体的にかかわり、積極的に学ぼう、あるいは何かを得ようとする意識が少ない研修歯科医が多くみられた、ということがわかった。さらに、学部国際プログラムへの研修歯科医の参加が交流プログラム学生と研修歯科医間の新たな国際交流を促進し、互いに学びあう場としての可能性を見いだすことができた。

## 文 献

- 1) 広島大学歯学部 Guide Book 2011, 広島大学歯学部, 2011: 12 (別表).
- 2) 清水和久, 益子典文, 小学校における「自律型国際交流学習」の特徴とそのデザイン—国際交流学習の実践事例の類型化に基づく特効の明確化—, 岐阜大学カリキュラム開発研究 2009: 27: 90-9.
- 3) 大谷 尚, SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示の手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—, 感性工学 2008: 10: 155-60.
- 4) 大谷 尚, 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学) 2008: 54: 27-44.
- 5) 大山 寛, 小原由紀, 伊木昌代, 大塚祐未, 近藤圭子, 他, 質的研究法を利用した口腔保健学科臨床体験実習の授業評価, 日医教誌 2011: 27: 13-8.
- 6) 岡田一彦, 安水 植, 協同学習の定義と関連用語の整理, 協同と教育 2005: 1: 10-7.
- 7) Moon J. A Handbook of Reflective and Experiential Learning: Theory and Practice. London: Routledge: 2004.
- 8) 植栗百恵, 「ふりかえり」と学習—大学教育におけるふりかえり支援のために—, 国立教育政策研究所紀要 2010: 139: 85-90.
- 9) 林 義樹, 学内理論と情報システム, 武蔵大学総合研究所紀要 1996: 6: 59-80.
- 10) 林 義樹, 学生参画のクラスワークの開発 (その1)—参画授業の理論と開発状況—中村学園大学研究所紀要 1997: 23: 69-82.
- 11) 林 義樹, 新世紀型の大学づくり—「学生参画型経営」への転換—「新・高等教育のデザインと政策展開」地域科学研究会 1997: 27: 1-9.
- 12) 細川敏幸, 島崎正明, 学生参加型授業の試み—「教育演習」趣味と科学—, 高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習— 2001: 12: 117-9.
- 13) 長尾洋子, 参加型授業と多層的双方向性「旅と観光文化」の授業実践から, 旭光大学総合文化研究所年報「東西研北」2008: 158-76.
- 14) 岡谷孝洋, 安武かづ, 広島大学における e-Learning の運用と展開—WebCT の活用とアクティブ・ラーニングへの志向—, サイバーメディアフォーラム 2008: 9: 17-22.
- 15) 安武かづ, WebCT のコミュニケーション機能を活用した協同学習のデザインと実践, 第3回 WebCT 研究会予稿集 2005: 23-6.

著者への連絡先: 岡 広子

〒734-8553 広島市南区西1-2-3

広島大学大学院医療保健学研究院 総合健康科学部門 口腔歯科医学連関開発学分野

TEL, FAX: 082-257-1572

E-mail: oghirako@hiroshima-u.ac.jp

## Assessment of a Pilot Collaboration of Trainee Dentists and Undergraduate International Exchange Programs

OKA Hiroko<sup>1)</sup>, UDIJANTO Tedjosasongko<sup>1,4)</sup>, OGAWA Tetsuji<sup>2)</sup> and TAKATA Takashi<sup>1,3)</sup>

<sup>1)</sup> Department of International Collaboration Development for Dentistry, Hiroshima University Institute of Biomedical & Health Sciences

<sup>2)</sup> Department of Advanced General Dentistry, Hiroshima University Hospital

<sup>3)</sup> Department of Oral & Maxillofacial Pathobiology, Hiroshima University Institute of Biomedical & Health Sciences

<sup>4)</sup> Faculty of Dentistry, Airlangga University, Indonesia

**Abstract** The Faculty of Dentistry, Hiroshima University has conducted many undergraduate international programs every year. One of the purposes of the programs is to encourage the internal internationalization of students and faculty members through international communication. To promote international communication and to enhance collaborative learning through the communication, we conducted a pilot collaboration seminar between post-graduate clinical training and undergraduate international exchange programs in 2011.

After the seminar, the participating international students evaluated that they were satisfied with the seminar. The results of the trainee dentists' assessments showed that they became aware of their own status through the communication, they understood the importance of non-verbal skills to communicate with non-Japanese speaking people, and many trainee dentists passively engaged in the process.

In conclusion, the pilot collaboration seminar helped to clarify the necessity of responding to internationalization, and we were able to approach international communication with a new method. Based on those assessments, we will try to develop a system for the seminar so that trainee dentists are more actively committed from the planning and management stage. We also hope to promote better understanding of the knowledge using "collaborative learning" as a next step.

**Key words** internationalization, collaborative learning, international students, trainee dentists, development